



写真等無断転載禁止

2022. 8. 5 発行 ニュースレター第300号

〒262-0019 千葉市花見川区朝日ヶ丘 5-24-2

TEL. 090-7941-7655 FAX: 043-483-0027 代表: 小西 由希子

E-mail: yatsudasukisuki@gmail.com, Home Page: <http://www.ceic.info/>

「未来のためのフィールドミュージアム」

NPO法人 自然観察大学学長 市川市 唐沢 孝一

個人的なことでは恐縮だが、私が育った群馬の実家は江戸時代からの農家であった。小学校4～5年頃まで住んでいた家には囲炉裏や馬小屋があり、初夏には藁葺きの屋根にアヤマが開花した。水は井戸水、ご飯は薪で炊き、縄を編み草履もつくった。「裏庭には二羽ニワトリがいる」の早口言葉のごとく鶏を、そしてウサギ、ヤギ、羊も飼育し、動物たちの世話は子どもたちの日課であった。山羊の乳絞り（搾乳）は得意技の一つである。



ニホンアカガエルの卵塊(2007年1月30日)

撮影: 唐沢孝一さん

「ソノモノ」なのか。米を売って生計をたてているとも思えない。では「モドキか」と思いきや、伝統的な「米作り」に拘り、無農薬、手植え、冬水田んぼ、古代米に挑戦し汗を流している。「農業にして農業ではない」、「モドキに似てモドキではない」のである。

そしてもう一つ。冷たい月光に照らされて、ニホンアカガエルの産卵が始まった。あの神秘的な体験は生涯の宝物の一つとして今も心の奥深くに刻まれている。2月の観察会ではヨシ原でウソやエナガ、ノスリなどを観察。6月のクモの観察会では樹陰に座り川名興先生による「ハエトリグモのフンチ」



ニホンアカガエルの卵塊調査をする唐沢さん

第5回「アカガエルの産卵を見に行こう会(2007年2月2日)」

子どもや孫に、江戸時代の生活さながらの幼少期の生活体験を話しても理解してもらえない。ちょっと前まで、といっても60年～70年前には、水道もガスもない、テレビや電話もない生活があたりまえであった。その時代に山村で生まれ育った人と、今の山村や都会育ちの子どもや孫の世代とでは、同じ山村を見ても別風景を見ていることが多い。前者は田舎暮らし「ソノモノ」であり、後者は田舎暮らし「モドキ」である。「モドキ」は「ソノモノ」ではない。別荘で暮らす都会人のように生活基盤は都会にあり、田舎暮らしは一種のロマンと化したモドキである。ここまで書いてみて、一つの発見があった。来年80歳を迎える筆者は、「ソノモノ」と「モドキ」の両方を体験した数少ない世代であり、今や絶滅危惧ⅠA類に近い存在なのだ・・・、と。

2007年1月30日、凍てつく厳冬の深夜に初めて下大和田を訪ねた。その時、二つのことが頭をよぎった。一つは、果たしてここは「モドキ」なのか



観察会で解説をする唐沢さん(左)

第85回下大和田観察会(2007年2月4日)

(昆虫相撲)の話に耳を傾けた。さらに、月々配信されてくるニュースレターでは、子どもや地域の人々が参加し、田起こし、田植え、草取り、案山子づくり、稲刈り、脱穀、餅つきや収穫祭などに生き生きと取り組んでいる。ニュースレターは今号で300号に及んだ。こうした取組が「モドキ」であろうはずがない。



第 85 回下大和田観察会(2007 年2月4日)

筆者の直感であるが、このグループの活動を一言で言えば、「ソノモノ」と「モドキ」をつなぐ橋渡しにあるのではないだろうか。東洋の風土に生まれた稲作とその文化を継承し、次世代に伝えるためのフィールドでの実技を伴う活動である。

ちば環境情報センターから毎年送っていただいているカレンダー。2022年の表紙写真は「早春の下大和田をドローンが捉えた景観」である。用水が流れ、畦道が続く。草原や林が隣接し、日本在来の生物種の生息地が広がっている。伝統的水田稲作を通してそこに暮らすあらゆる生命が一つの生態系を構成している。これこそが「生物多様性の保全」であり、「生きたフィールドミュージアム」そのものである。数千年にわたって培われてきた稲作文化の「知の体系」を次世代へ伝える、そのための実験が下大和田で行われているように思えるのだが、どうであろうか。遠い未来の、都会生まれの「モドキ」たちに必ずや感謝される日が来ることを夢見たいものである。(写真提供: 田中正彦)

お米にまつわるミャンマーの話

～第3回：一言では語れないミャンマー式のあいさつ～

言語というのは、その国々の人々の文化や価値観を表す鏡であり、その人たちが住む世界そのものだと思います。言語によって、その文化にしかない概念(あるいは概念の欠如)を見つけては、日本語との共通点や違いを認識したりするのはとても興味深いです。例えば、日本語の「ご飯」という言葉には、「炊いたお米」と「食事全般」の2つの意味があります。ミャンマー語で炊いたお米のことを「タミン」というのですが、タミンは日本語のご飯と全く同じで、食事の意味する言葉でもあります。「米＝食事」という考えは、米を主食とする文化の特徴なのかもしれませんね。

ところで、ミャンマー語でもう一つ面白いと思ったのが、ミャンマー語には「こんにちは」に相応する言葉がないことです。たまに「こんにちは」を「ミンガラバー」と訳されているのを見ることがありますが、これはかなりフォーマルな言い回しで、お店の人がお客に向かっていう「いらっしゃいませ」といった場面で使われるもので、知り合い同士で使うことはまずありません。その代わりに知り合いと出会った際、ミャンマー人は何というかと言うと、「タミン・サー・ピービー・ラー？」と言います。直訳すると「ご飯はもう食べた？」と言う疑問文です。返答には特に定型文があるわけではなく、訊かれた方は、「まだ食べてないよ。」とか、「もう食べたよ。」と返し、さらに相手から「じゃあ、何

千葉市若葉区 岩沢 久美子

食べたの?」「なんで、まだ食べてないの?」と言う風に、ご飯を巡ってしばらく会話が continues のです。

初めの頃は、ミャンマー人がなぜそんなまだるっこしい挨拶をするのかがとても不思議でした。けれども、しばらくこの国に暮らしてみても、なんとなく理由がわかったような気がしています。ミャンマー人は、人と人とのつながりをとても大事にする文化です。人生において出会った師や先輩方を慕い、彼らから学び、また時に助けを借りながら自らの人生を切り開いていきます。また、日々の生活において



ダウンタウンの街並み

ヤンゴン市南端のダウンタウン(市街地)には、イギリス植民地時代に建てられた建物が多く残っており、今も庁舎として使われている。

も、お互い困った時に手を差し伸べ合い、支え合いながら、様々な逆境を切り抜けて生きているのです。



ダウンタウンにあるボダタウン・マーケット

戦略的な地勢から、歴史的に争いが多く、植民地支配、軍事政権による抑圧と貧困を経験し、自然からは常に洪水などの災害リスクに晒されているミャンマーの人々にとっては、こうした人との関係を重んじる文化が醸成されたの

は必然なのかもしれません。だからこそ、日々の挨拶においても手を抜かず、食事をしたのかと訊き相手を気遣う意思表示は、彼らにとって、とても重要なプロセスなのだと思います。そんなことを考えてからは、日々の暮らしの中で周りのミャンマー人の間で交わされる「タミン・サー・ピービー・ラー？」のやりとりがとても趣深く、かつ微笑ましく感じられたのを今も覚えています。

そんなミャンマーですが、政変から1年以上経った今も、状況は全く好転していません。国連の声明によると、国内外の避難民は100万人を超え、国民の半数近くが貧困状態にあると言います。つまり、国民の半数が正に食べるのに困るという状況なのです。そのようなミャンマーの現状を考えると、「タミン・サー・ピービー・ラー？」の言葉に特別な重みを感じられてきます。

禾（のぎ）の秘密を探れ！～米についての針、なんのため？～ ③

千葉市中央区 緑町中学校1年生 小橋 里菜（編集：母）

9. 実験と観察⑦「禾の生え方の観察」2020年10月～

自分で育てた5種類の稲穂を広げたり、切り離したりして、一粒一粒の禾がよく見えるような状態にし、紙に貼り付け、200枚弱のサンプルを作り観察しました。また、イノシシに食べられた稲穂やキジに食べられた稲穂なども貼り付けて観察しました。そして、以下の結果を得ることができました。

- ☆「禾あり」「禾なし」の種から育った株に違いは見られない。
- ☆禾には「一番槍」（←勝手に名づけました。まとまって生えている稲穂を守るように一番先頭に突き出ている禾のこと）がある。
- ☆赤米、ベニコマン、カンニホは、「一番槍」が一番上の種もみについていることもあるが、3番目～7番目くらいの種もみについていることもある。禾の生え方は長さがバラバラであったが、実際に生えている時は先頭が揃っていて、強度を増そうとしているようだった。禾が細かったり短かったりする種もみは、胚乳が少ないことが多かった。
- ☆緑米は一番上に生えている種もみの禾が「一番槍」であり、それ以外の種もみにはほとんど禾がついていない。
- ☆コシヒカリは品種改良されていて、禾がない品種とされているが、短い禾がついている株もある。



写真：カンニホの禾の生え方（★マークは「一番槍」）



写真：緑米の禾の生え方（★マークは「一番槍」）

新浜の話54 ～大黒柱さんたち～

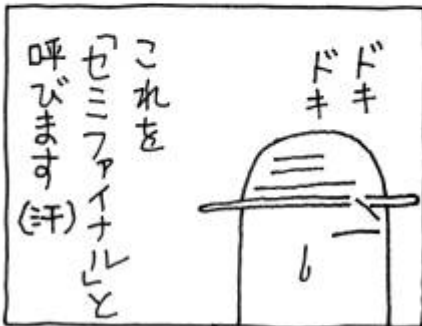
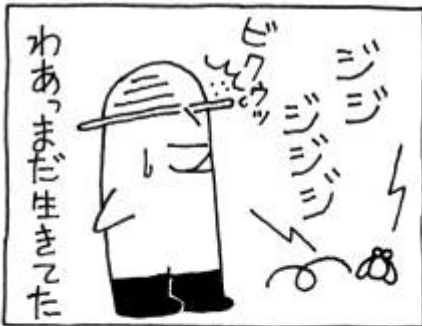
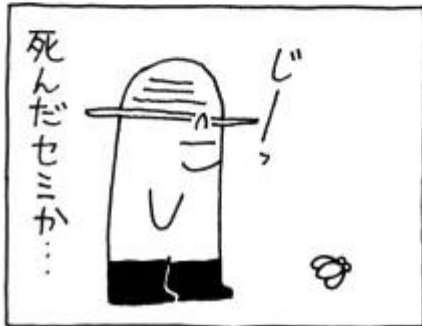
千葉県野鳥の会 市川市 蓮尾 純子

「大黒柱1号さん」こと石川一樹さんが1991年12月から働いてくれるようになったことで、保護区の観察路の整備など、いろいろな作業が少しずつ軌道に乗りはじめました。1994年から働くようになった佐藤達夫さんは、高校生のころから時々アルバイトやお手伝いに来てくれていたのですが、高校卒業後、造園関

スロマン¹⁹

作: 7やま
あきこ

あなたは
この体験を
したことは
ありませんか？
ボクはあります
(作者談)



つやまあきこウェブサイト
21世紀絵コロジ〜 <http://www.21eco.net>

係の会社に就職し、3年ほどで会社をやめて北海道や沖縄の与那国島などで働いていました。一樹さんがICF(国際鶴財団)にボランティアに行く前、後任を探している時、たまたま達夫さんから電話をもらいました。「4月からはどうするの?」「それが、まだ決まっていないうですよね」「だったら、こちらに来てもらえないかしら」

「アルバイト募集」の貼り紙を見て来ることになった一樹さん、ぴったりのタイミングで来てくれた達夫さん。観察舎で働く人たちは、いつも幸運を運んでくれたような気がします。1990年代には夫嘉彪も50歳の山坂を越えて、だんだん外仕事がきつくなる年ごろの上、定年間近。引き継いでくれる助っ人さんを真剣に探しはじめた時分です。働き手を探す時、できることなら、既に他の職場を経験している人を選びたいと思っていました。観察舎はある意味では特殊な職場なので、他と比較してここを選んでくれることを希望していたのです。大黒柱1号さん、そして2号さんが定着、そのころは常勤してもらえるだけの予算がなく(もちろん賞与や各種手当もなく)、日給と交通費のみの市川市非常勤職員でした。

達夫さんは1995年に、一樹さんと同様にイギリスのRSPB(王立鳥類保護協会)のミンズメア保護区を皮切りに、数カ所の保護区などで1年間のボランティア研修をして、1996年に帰国しました。ICF(国際鶴財団)とRSPB(王立鳥類保護協会)については、後でもう少し書かせていただきます。ふたりとも、言葉も通じない海外で、無我夢中の1年間を終えて帰国した時には、「何もかも灰色に見えるんです」と、日本での日常に戻るのがつらそうでした。

1996年、いよいよ大黒柱1・2号さんがふたりそろって働いてくれることになりました。しかし、当時の市川市の非常勤職員というのは、まるまる1年間を続けて働くことができない制度です。3か月、雇用しない期間をはさめば、翌年も継続雇用ができます。もうひとつ、臨時職員という制度があり、これは賞与もあり、1年間は続けて働けますが、翌年も続けて雇用することはできません。(実は蓮尾2名も臨時職員という身分でしたが、唯一の例外として勤続雇用してもらっていたのです)さあ、どうしたらよいか。

ふたりは結局それぞれ3か月の空白期間を入れて、9か月ずつ働いてくれることになりました。3か月の期間、一樹さんは再びICFへ、達夫さんは鳥島のアホウドリ調査などへ。鳥島で知り合ったのが、後に大黒柱3号さんとなる川上正敬さんです。川上さんの本職は画家で、鳥関係の調査なども仕事としていました。崩落の危険が高い鳥島の燕岬から、より安全な初音崎へと繁殖地を拡げるために、デコイ(鳥の模型)を置いて誘致する作戦がとられていましたが、デコイの補修のために鳥島に派遣されていたところでした。

この時期のこと、特に大黒柱さんたちの活躍の日々は、ウェブサイト「小説家になろう」に投稿した「新浜だより 1992年~2000年」(日本野鳥の会東京機関誌「ユリカモメ」に連載したものの再録)に書いています。

【発送お手伝いのお願い】ニュースレター2022年 9月号(第301号)の発送を9月7日(水)10時から千葉市民活動支援センター会議室(千葉市中央区中央2-5-1 千葉中央ツインビル2号館9階)にておこなう予定です。ただし新型コロナウイルス感染の拡大状況によっては中止する場合がありますので、お手伝いいただける方は事務局(小西 090-7941-7655)までご連絡ください。

あなたも入会しませんか キリトリセン

住所〒 _____

ふりがな _____ 男 女 Tel _____

E-mail _____ FAX _____

会費の郵便振替口座は 00130-3-369499 です。

編集後記:ちば環境情報センターニュースレターは、1997年8月1日発行の創刊号から数えて2022年8月号で300号になりました。この間、コロナ感染症拡大で発行できなかった2020年3月号を除いて毎月発行できました。これも会員の皆様のおかげと感謝しています。400号発行をめざしてさらに充実させていきたいと思ひます。今後ともご協力よろしくお願ひいたします。 mud-skipper

<小山町での活動> 報告：たんぼぼ

☆第 206 回 小山町 Y P P 「畦と水路の整備」

7月16日、小山町 Y P P 「畦と水路の整備」の予定でしたが、午前中雨天のため、全体での作業を中止し、有志により作業が行われました。また、翌 18 日には有志による山の整備を行ない、アオキ等の低木を伐採するとともに、おだに用いる成熟した竹を切り出しました。昨季までおだに用いて来た竹の内、古かったり破損したものを選別し、8月22日に予定している小学校たんぼの案山子づくり用部材を10組つくりました。

(参加 各日大人2名)

☆令和4年度期 大椎小学校たんぼ草取り作業 2022年7月8日(金)

7月8日、大椎小5、6年生による大椎小たんぼの草取り作業が行われました。児童に加え、多くの保護者の方々が参加され、大変丁寧でパワフルなご活躍に、たんぼ周囲までとても綺麗に除草されました。なお、7月13日はあすみ小学校の草取り作業の予定でしたが、児童に COVID-19 罹患者が出た影響で中止になりました。

【谷津田・季節のたより】

<下大和田町> 報告：田村光範

7月 月初 今年は記録的に早い梅雨明けから猛暑日が続き、遅れていた稲の成長が一気に進みました。たんぼの中の雑草も大量に発芽してしまい、雑草取りが大変でした。

月中 稲の分けつも進み、しっかりとした株になりました。根元の方が膨らみ始め、穂ばらみ期(稲の株元で幼穂が出来ること)に入ったようです。

月末 いよいよ稲から穂が出てきて出穂(しゅっすい)が始まりました。これから約1ヶ月間、虫やスズメ、台風など色々な外敵に耐えてやっと収穫できます。

谷津田では春から居着いているヒクイナの鳴き声が聞こえます。カルガモの親子も小川が子育ての場所になっていて、日に日に大きくなっています。カブトムシも樹液に集まってきました。

<小 山 町> 下線は報告者

・草木の開花

ねむの木満開(7/1) たんぼぼ, キツネノカミソリ(7/3), ヤマユリ(7/13) 高山

・セミの初鳴き

ヒグラシ(7/9), アブラゼミ(7/16) 高山, ミンミンゼミ(7/30), ツクツクボウシ(7/31) たんぼぼ

クマゼミ 7/23日、水辺の里で旺盛に鳴くが小山には7/31日現在来ていない 赤シャツ親父

・その他の生物

アサギマダラ(7/20) 高山, 笹の葉にヘイケボタル(7/17) たんぼぼ

・稲の出穂開花状況 たんぼぼ

コシヒカリ初出穂開花(7/17), 大椎小コシヒカリ(7/21), 黒米(7/22), あすみ小コシヒカリ(7/26)

【イベントのお知らせ】 主 催：NPO法人 ちば環境情報センター

連絡先：小西 TEL. 090-7941-7655 , E-mail : yatsudasukisuki@gmail.com

<下大和田谷津田>

・第 281 回 下大和田 Y P P 「コシヒカリの稲刈り」

日 時：2022年 8月27日(土) 9時45分～14時 ※雨天などの場合は翌28日(日)に実施

持ち物：長袖長ズボンの服装、長靴、軍手、帽子、ゴミ袋、飲み物、弁当、敷物

参加費：米づくり年間参加者以外300円(小学生以上)

・第 272 回 下大和田谷津田観察会とゴミ拾い

日 時：2022年 9月 4日(日) 9時45分～12時 雨天決行

内 容：秋の花が咲き始め、赤とんぼも色付く頃です。トンボの調査をしながら谷津を巡ります

持ち物：筆記用具、飲み物、長袖長ズボンの服装、長靴(通常の)、帽子、あれば双眼鏡、ゴミ袋、午後も活動する方は弁当、敷物 参加費：100円

<小山町谷津田>

▼8月期 小山町 YPP 「お盆休み」。8月期の小山町 YPP の活動はお休みとします。

なお、個人的な作業につきましても、小山町の習わしに従いお盆期間中(8/13～16日)は休止とします。

※ 小山町の谷津田にご興味のある方は、赤シャツ親父 (e-mail: tomizo_i@nifty.com)までご連絡下さい。

